

http://www

知求会 EU 支部ニュースレター

Newsreel Word

2016 年 4 月 1 日
第 17 号

EU 支部長: 松原真実子 MAMIKO. MATSUBARA

青森県八戸市出身 国際文化専攻修了 修士論文『異文化間コミュニケーションの研究—フィードバック作用—』
現在 大阪府 太成学院大学 勤務

e-mail: leoshironeko@yahoo.co.jp



この号の内容

- 1 イタリア 名門ミランに
名を刻む名手トップ10
- 2 EU 支部だより

- ・ベルルスコーニ会長
就任 30 周年
- ・本田の名前は...

イタリア 名門ミランに名を刻む名手トップ10

AC ミランのシルビオ・ベルルスコーニ会長が 1986 年 2 月 10 日にクラブを買収して以来、30 年の月日が流れた。その後ミランには多くの名手が所属し、黄金期を築き上げてきた。イタリアのサッカー情報サイト「カルチョメルカート・コム」は、名物オーナーが獲得した歴代の名手トップ 10 を特集している。ミランの外国人選手として歴史に残っているのが、1980 年代後半から 90 年代前半にかけて活躍した「オランダトリオ」だ。FW マルコ・ファン・バステン、FW ルート・フリット、MF フランク・ライカールの 3 人は、ミランの象徴とまで言われた。1988 年に欧州選手権西ドイツ(当時)大会を制した代表チームでの実績もさることながら、トヨタカップ(現 FIFA クラブワールドカップ)2 度の優勝を果たしたミランでの印象が強い。ランキング上では、天才ストライカー、ファン・バステンが栄光の 1 位、司令塔フリットが 4 位、超万能型の名手、ライカールが 6 位とされた。また、外国人ストライカーとして名を馳せたのが、元ウクライナ代表 FW アンドリー・シェフチェンコだ。特に、インテル戦で滅法強く、この伝統のミラノダービーで歴代最多の 14 ゴールを決めている。UEFA チャンピオンズリーグ制覇も果たし、2004 年にはバロンドールの栄冠にも輝いた。ランキングでも、ファン・バステンに次ぐ 2 位とされている。同様に、「リベリアの怪人」と呼ばれた FW ジョージ・ウェアもまた強烈な印象を残したストライカーだ。強靱なフィジカルを生かしたプレーで単騎突破でゴールを重ねたストライカーは 8 位にランクされた。「左足の天才」と呼ばれた元ユーゴスラビア代表(当時)の MF デヤン・サビチェビッチも抜群のテクニックで観衆を魅了した。ランキングではカカーが 3 位、サビチェビッチが 10 位とされた。そして、イタリア人選手もまた会長が愛する存在だ。中盤の底で長短のパスワークを繰り出す「マエストロ」、MF アンドレア・ピルロが 5 位に、何度オフサイドに引っ掛かっても最終ラインの裏を狙い続けたストライカーの FW フィリッポ・インザーギが 7 位、カテナチオの伝統を持つイタリア国内でも歴代有数の DF と呼ばれるアレッシンドロ・ネスタが 9 位にランクインした。日本人として歴史上で初めてミランでプレーしている日本代表 FW 本田圭佑だが、フットボール史に残る名手の中に、ランキング入りはならなかった。しかし、ランキングの顔ぶれを見れば世界でもトップクラスの選手ばかり。あらためて、この 30 年間でベルルスコーニ会長が築き上げたミランがいかにか名門であるかを再確認させるものになっている。ランキングは以下の通り。1 位 マルコ・ファン・バステン 2 位 アンドリー・シェフチェンコ 3 位 カカー 4 位 ルート・フリット 5 位 アンドレア・ピルロ 6 位 フランク・ライカール 7 位 フィリッポ・インザーギ 8 位 ジョージ・ウェア 9 位 アレッシンドロ・ネスタ 10 位 デヤン・サビチェビッチ

サッカーマガジンゾーンウェブ編集部 ● 文 text by Soccer Magazine ZONE web



- ・学位記授与式
- ・東日本大震災

EU 支部だより —春になるとのこと—

私が勤務する大学でも、先日 学位記授与式が行われた。謝恩パーティにもお招きいただき、学生たちと楽しいひと時を過ごさせてもらった。たくましく成長し輝く瞳で巣立っていく学生たちに、誇らしい気持ちになり、ほんの少し胸をはっている自分に気がついた。

一方、毎年この日をむかえと思い出すことがある。それは、東日本大震災である。当時、勤務していた千葉の大学では、予定どおりに式を行うことができず、学生たちの残念な気持ちを思うと心が痛んだ。被災地の学生たちは、式のことを考える余裕もなかっただろうことを思うと、心の痛みはさらに増した。

今、私たちがこうして式をむかえ楽しいパーティも行えることは、当たり前のように、当たり前ではない。ということに心に刻み、大切にそして感謝をこめて進んでいかなければいけない。そんな思いを胸に毎年気持ちを引き締め学位記授与式の日を迎えている。(松原)

